

「ISNA JAPAN」(ISNA 日本)の基本方針について

2026年4月8日

ISNA 日本スヌーズレン-MSE®研究・資格認定協会理事長

ISNA 日本スヌーズレン総合研究所終身名誉会長

九州女子大学人間科学部教授

国際スヌーズレン専門支援士スーパーバイザー

姉崎 弘

当協会創設の理念としては、ISNA(国際スヌーズレン協会)の創設に貢献されたスヌーズレン創設者たちの実践と思想およびドイツ・フンボルト大学名誉教授 Prof.Dr.Mertens,K(以下、マーテンス博士)のスヌーズレンの実践と理論を基本に踏まえた上で、当協会創設者である 姉崎 弘の実践と研究により新たに開発された ISNA JAPAN(ISNA 日本)のスヌーズレン-MSE®の理論と実践を社会に啓発しその普及を図るものです。従って、2026年度より実施する「ISNA 日本」と「ISNA ドイツ」の両者の認定した資格「国際スヌーズレン支援士」の資格認定セミナーは、創始者たちとマーテンス博士の実践と理論の中心的内容を踏まえて、姉崎がこれまでのスヌーズレンの実践と研究を通じて考察を行い独自に創ったスヌーズレンの基礎的カリキュラムと内容によって実施されます。当協会では、確かなスヌーズレンの理論と実践の基礎的理解を有するスヌーズレン実践者を育成していきます。

姉崎は創始者とマーテンス博士のスヌーズレンの著書をそれぞれ 2015年と2009年に日本語に翻訳して出版し、日本社会に確かなスヌーズレンの考え方や理解を広めました。創始者たちの考え方は特に福祉の分野では貴重な示唆に富みますが、残念ながら他分野への適用がなく、理論的に体系化されているとは言えないところがあり、説得力に乏しいと感じられます。

一方、マーテンス博士は、創始者と同じくスヌーズレンの実践を行い、創始者の実践を自らも追実践した上で、創始者たちの重度知的障がい者への実践に限らず、さらに認知症者や高齢者、発達障がい児者(ADHD児やASD児)、乳幼児、バーンアウト症候群者、さらに健常児者などに至るまで、実にさまざまな人々に幅広くスヌーズレン実践を行って、その適用や効果を科学的に検証されました。そして、そうした実践を踏まえた上で、医学研究等の科学的な知見を踏まえて、実践の理論化を試みた世界のスヌーズレン実践と研究のパイオニアであったと言えます。しかしながら、今日までマーテンス博士が世界から正しく評価されているとは言えないのが現状です

スヌーズレンは、実践のみに終わらず、実践的な考察と共に、科学的に探究されてその知見を蓄積していかなければ、さらなる発展はあり得ません。このことはこれまでの姉崎の実践と研究による信念です。

このような考えのもとに、姉崎は、2025年に、わが国初となるスヌーズレンの「研究と資格認定」を主な業務とする「ISNA 日本 スヌーズレン-MSE®研究・資格認定協会」を設立しました。私どもの協会は、スヌーズレンの研究とそれを踏まえた研修会や資格認定セミナーを開催して、スヌーズレンに精通した人々を育成していきます。海外の論文では、今日スヌーズレンとMSEは同義語として、「MSE-スヌーズレン」という用語が主に使用されていることから、当協会名にもこの2つの用語を取り入れています。

この協会の前身は2009年設立の「ISNA 日本支部・全日本スヌーズレン研究会」に遡りますが、今日ドイツにあるISNAは世界に支部を持たない団体になっていることに注意する必要があります。そのため、私どもの団体の名称は、支部を付けずに、「ISNA 日本」としています。

今日、創始者の一人 Verheul,A(フェアフル)は、ISNAを退き、デンマークのモーリッツ(Maurits,E)が創設したISNA-mseに所属を換えたため、ISNAの会長は、マーテンス博士の指導を受けた後任のドイツのルディ(Rudi,G)が就任し、マーテンス博士はISNAの名誉会長に就任しています。モーリッツは、マーテンス博士

から ISNA を引き継ぎましたが、ISNA ではなく、独自に ISNA-mse を創りましたので、ISNA の現会長はマーテンス博士の信頼を受けたルディが引き継ぐことになりました。元々 ISNA はフンボルト大学でマーテンス博士の主導の元に組織されたことから、ISNA を創ったのは、実質的にマーテンス博士でした。

マーテンス博士は、基本的に mse をスヌーズレンとは異なるとして、認めませんでした。その理由は、mse は環境が主になっていて、刺激が多すぎると考えていました。本来スヌーズレンは、一人ひとりの個のニーズに応じて、リラクゼーションやレジャー、教育、セラピーなどを選択することができるのですが、特に、環境、言ってみれば、器材等が主になり過ぎていることに警告を発していました。人ではなく、器材が主になると、それはもはやスヌーズレンではなくなることに危機意識を感じていました。マーテンス博士も、創始者たちと同じく、周りの器材よりも、対象者に接する職員などの態度やその在り方を最も重視していました。